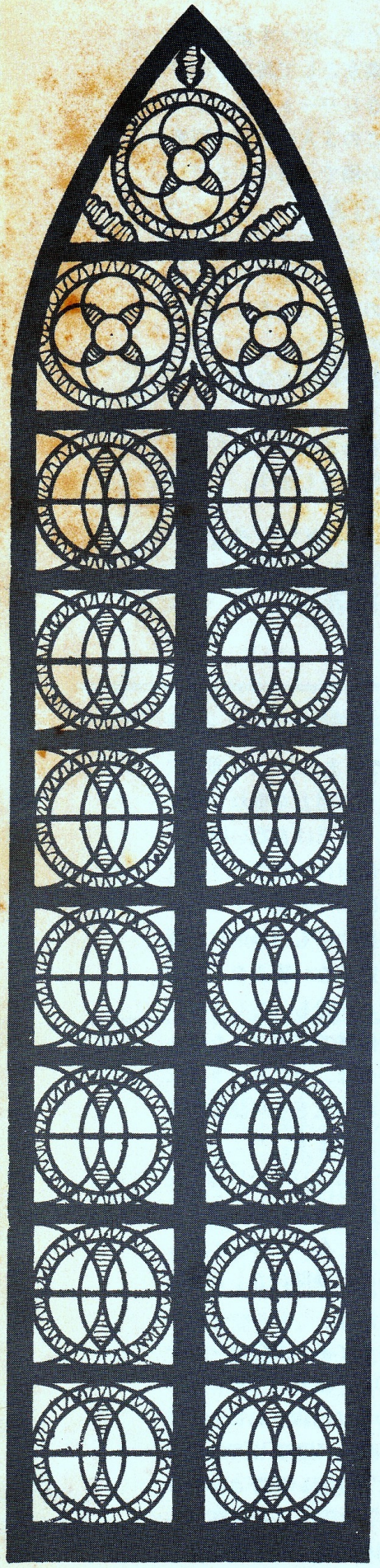


今仲幸雄・佐々木まり子・佐々木正利

バッハの夕べ

1982年１１月２２日(月)

PM 6:30

岩手県民会館中ホール

主催／盛岡バッハカンタータフェライン

ごあいさつ

今晩の演奏会の第１の、そして最大のネライは、今仲幸雄、佐々木まり子、佐々木正利という３人のソリストを紹介することにあります。３氏ともに新進気鋭の音楽家として将来を期待されており、今晩のプログラムであるバッハの教会カンタータは、主要なレパートリーの１つと伺っております。いくらかでも声楽に興味をもたれる方は、是非とも、この３人の名前を脳裏にとどめておいていただきたいと存じます。今後、必ずや多くの演奏会の場で、目にするでしょうから。

第２のネライは、我々の合唱団の新たなスタートラインとしてであります。我々が、バッハの教会カンタータを何とはなしに始めてから６年目を迎えます。この間の歩みは遅々たるもので、焦りと苛立ちの連続であったような気がします。今晩のプログラムの１つでもある「教会カンタータ４番」は我々が活動を始めて最初に取り上げた曲であり、その意味では、これまでの活動を振り返るとともに佐々木正利氏をこの４月から指揮者に迎えた我々の新たな出発にとって、この演奏会は意義深いものになると思います。

最後に、はるばる盛岡まで来ていただいた器楽のメンバーと、寒い中をお集まりいただいた聴衆の方々に深く感謝し、我々の思いのいくばくかが伝わらんことを切望いたします。

盛岡バッハカンタータフェライン
代表／石倉　久夫

演奏会にのぞんで

盛岡の地にバッハのカンタータを歌う合唱団が生まれて、はや５年がたちました。その間、すでに20曲余りのカンタータが取り上げられ、純粋に、又着実な歩みをもって努力を重ねられてきた団員の方々には、心から敬服いたします。世界的にみても、カンタータだけを歌い継いでいる団体の例はほとんどなく、宗教的基盤もない日本の、しかも一地方都市においてこうした合唱団が存在することは、ヨーロッパの人々にとっても、ただただ驚くばかりのようでした。

バッハの音楽には、いわゆる駄作というものがなく、そのどれもが音楽的にも精神的にも極みに達しているものなので、私達がそこから学び得ることは、実に計り知れない膨大なものがあります。師、小林道夫の音楽に向ける真摯な態度によって育くまれてきた私達も、もしそこにバッハが介在しなかったら、これほどまでに音楽の喜び、すばらしさを体験できなかったかもしれません。学ぶことが、即喜びとなるバッハの音楽を「父」にたとえれば、カンタータフェラインと私達は、言わば兄弟とも言うべき関係にあるのですが、おやじの偉大さを再認識するためにも、今後、より柔軟な巾広い視野を持つことが必要であると感じています。バッハの研究者としても優れた業績を残したシュヴァイツァー博士は、「すべての音楽はバッハに源を発し、バッハに帰結する」と語っておられますが、他の作曲家の音楽に触れるたびに、彼らの目がいつもバッハを向いていることを感じるから、なおさら彼らの曲にも、もっともっと親しまなければならないのだと思います。カンタータフェラインも、今一つの転換期にさしかかっているのではないでしょうか。

本日、ドイツからはるばる参加して下さった今仲幸雄氏をはじめ、オーケストラのメンバーの皆さんも、かつて東京芸大バッハ・カンタータクラブでバッハを語り、巣立って行った仲間ですが、今はそれぞれの場で、バッハを通して培った貴重な財産をもとに活躍されております。私達も、こうして備えられた盛岡の地にて、皆様と音楽の喜びを分かち合うことができたなら、これ以上の喜びはありません。一夕、心ゆくばかりバッハの世界に身を置いて下さいますように。

皆様の御来場とお励ましを心より感謝いたし、これからの御支援と御指導をお願い申しあげます。

佐々木　正利
まり子

プログラム

指揮：佐々木　正利
合奏：東京芸大バッハアンサンブル
合唱：盛岡バッハカンタータフェライン

○カンタータ第158番「平和汝とともにあれ」　J.S.バッハ

Bas：今仲　幸雄
Vn：田崎　瑞博

○カンタータ第170番「安息をたのしみ心の喜びを欲せよ」　J.S.バッハ

Alt：佐々木　まり子

休　憩

○カンタータ第189番「わが魂はほめ讃う」　J.S.バッハ

Ten：佐々木　正利

○カンタータ第４番「キリストは死の絆につかせたもう」　J.S.バッハ

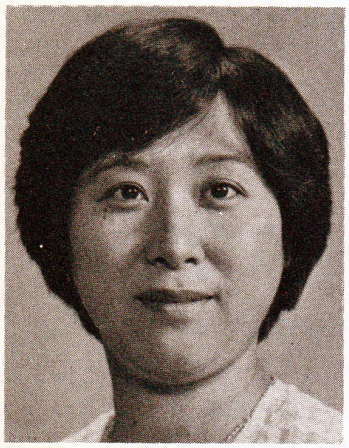
Bas：今仲　幸雄

カンタータについて

現存するバッハのカンタータは約230曲にものぼりますが、実際には350曲位は書いたのではないかと言われています。その大部分（約50曲の世俗カンタータを除く）がキリスト教の年中行事、つまり日曜日ごとの礼拝や降誕祭、復活祭など特別行事の為に作られた、言わば実用音楽であり、当日の礼拝の内容に即して作曲されています。礼拝中人々は説教とともにこの音楽を聴いて、心に思いを刻み込んだものでした。その生涯のすべてを神に捧げたバッハでしたので、どのカンタータをとっても信仰のうちにある彼の生命の息づきが感じられます。元来カンタータとは「歌うもの」という意味でソナタ（奏でるもの）に対をなすものであり、歌詞は聖俗を問わず、小編成の器楽伴奏を伴ったいくつかの楽章に分かれた声楽曲のことを指すのですが、規模の上からも用途からもバロック期の作曲家に好んで作られ、カリッシミ、シャルパンティエ、ラモー、シュッツなどといった名作曲家を生み出しましたが、バッハはそれらの頂点をなす人です。曲中使われるレチタティーヴォ（朗唱）とは、言葉の自然な抑揚によって作曲された「音程付き語り」であり、アリア（詠唱）が内容に即した旋律表現で情感込めて歌われるのに対なる様式です。シンフォニアやソナタという名の曲も出てきますが、これは単に器楽で奏される曲の意で、古典派以降の意味合いとは全く違います。コラールは宗教改革者ルターが聖書を重んじ、人々を積極的に礼拝に参加させようと、歌唱によって祈禱や讃美を行わんとして始めた曲種で、信徒全員で歌ったのが通例であり、人々はそのメロディに慣れ親しみ、用途によって特徴づけられた旋律も少なくありません（受難コラール、復活コラール）。

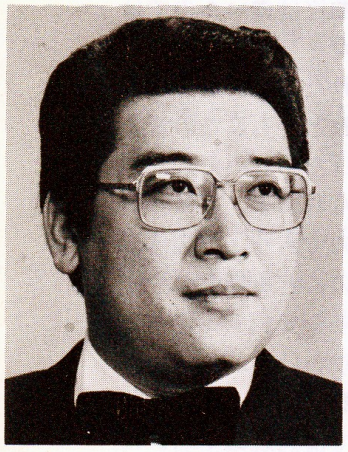
○今仲　幸雄（Bas）

千葉県立佐倉高校を経て、1973年東京芸術大学声楽科卒業。在学中、渡辺高之助、高折続、小林道夫の各氏に師事。特にリート、カンタータの研鑽を積む。西ドイツ、デットモルト北西ドイツ音楽大学入学。1978年ウィーン国際シューベルト・ヴォルフ歌曲コンクール入賞。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール音楽部門第1位入賞。デットモルト音大代表として、ディートリヒ・フィッシャー・ディスカウ指導によるシューベルト歌曲研究講座参加。成田市文化功労賞受賞。1981年デットモルト音大卒業。西ドイツ演奏家国家試験最優秀合格。ヘルムート・クレッチマール、ディートリヒ・フィッシャー・ディスカウに師事。現在、オラトリオ、リート歌手として、西ドイツを中心に活躍中。デットモルト・ルーテル合唱団発声指導者。



○佐々木　まり子（Alt）

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院ソロ科修士課程修了。音楽を伊藤亘行氏、森明彦氏に師事。ＮＨＫ新人演奏会に出演。学部在学中より、小林道夫氏のもとにおける芸大バッハ・カンタータクラブ演奏会では、数多くのカンタータ、オラトリオのアルトソロを受け持つ。又、モーツァルト「レクィエム」「戴冠ミサ」、ヘンデル「メサイア」、バッハ「ロ短調ミサ」等オラトリオを中心に、大学合唱団等と多数共演。1980年に夫君佐々木正利氏と共に、デットモルト北西ドイツ音楽大学に留学。ヘルムート・フレッチマールに師事。その間ドイツにおいて、バッハを中心にした演奏会に数多く出演。特にヒルデスハイムにおけるアルト・ソロ・カンタータ、ミュンスターにおけるC. PH. E. バッハのマニフィカートは、現地新聞紙上で絶讃される。今春帰国以来、仙台、名古屋、東京の各地で、「ドイツ葬送ミサ」（佐々木正利指揮）、「カンタータ66番、147番」（ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮）、「ヨハネ受難曲」（岳藤豪希指揮）他多数の演奏会で活躍中。現在盛岡市在住。

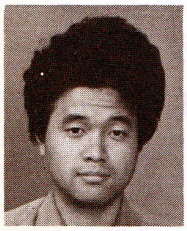


○佐々木　正利（Ten）

1969年盛岡一高卒業。東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。楽理を服部幸三、角倉一郎、声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦、作曲を松本民之助、宗教音楽を岳藤豪希の各氏に師事。学部在学中より宗教音楽に造詣が深く、特に1978年の芸大「マタイ受難曲」公演では、エヴァンゲリスト（福音史家）として高く評価され、バッハの専門家として揺るぎない地位を獲得。翌年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャーに師事、南ドイツで数回歌曲リサイタルを持つ。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門5位入賞。同年ウィーン楽友協会ホールにおける「マタイ受難曲」においては、「若き日のペーター・シュライヤー」と現地各新聞で絶讃される。同年デットモルト北西ドイツ音楽大学に留学。ヘルムート・クレッチマールに師事。ドイツを中心に、オランダ、ベルギー等で多数演奏会に出演、各地で好評を博す。小林道夫氏のもと長年に亘り、芸大バッハ・カンタータクラブの指揮を務める。現在、岩手大学音楽科助手。二期会会員。盛岡バッハカンタータフェライン指揮者。

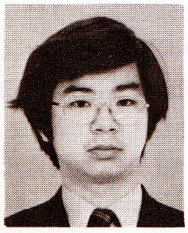
○田崎　瑞博（1st Vn）
昭和33年生まれ。5才から土浦市で桑田晶氏より、東京芸大では外山滋氏より、音楽全般とヴォイオリンを学ぶ。バッハカンタータークラブには約5年間在籍。現在、音楽各方面について修業中。

○津留崎　京（2nd Vn）
北海道生まれ。北海道教育大学特音を経て東京芸術大学卒業。井上需、西川修助、多久興、ジャン・ローラン、日高毅、塩川悠子諸氏に師事。バッハカンタータクラブ所属。

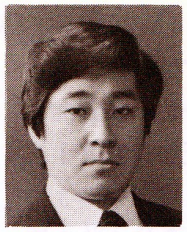


○杉山　光太郎（1st Vla）
東京芸術大学卒業。同大学院室内楽科に在学中。浅妻文樹、日高毅の各氏に師事。バッハカンタータクラブ所属。

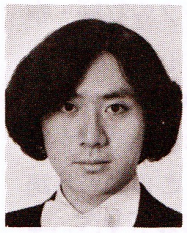
○大木　愛一（Vc）
東京芸大器楽科、同大学院音楽研究科を経て、現在、大阪教育大助手。チェロを阿保健、松下修也、堀江泰の各氏に師事。芸大在学中、同大学バッハ・カンタータクラブにて通奏低音奏法を研鑽、小林道夫氏の指導を受ける。



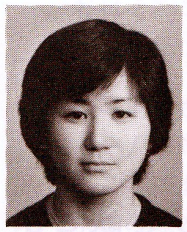
○蓮池　仁（Kb）
昭和36年12月東京生まれ。中学生の頃よりコントラバスを始め、昭和53年より永島義男氏に師事。現在、東京芸大3年。



○立川　和男（Fl）
1978年、東京芸術大学大学院修了。宮本明恭、小泉剛、吉田雅夫の諸氏に師事。1973年にはスイス、フランスにてマルセル・モイーズに師事。現在、日本フィルハーモニー交響楽団。都立芸術高校、NHK学園講師。



○長岡　大輔（Ob）
1961年東京生まれ。東邦音大附設中、東京芸大附属高を経て、現在同大学音楽学部4年。オーボエを鈴木尚雄、梅原美男、W.リーバーマン、H.ヴィンシャーマン、G.パッシン各氏に師事。東京芸大バッハ・カンタータクラブ所属。



○今井　奈緒子（Org）
1959年東京生まれ。1982年3月東京芸術大学オルガン科卒。オルガンを河野和雄、秋元道雄、広野嗣雄の諸氏に師事。即興を岳藤豪希氏に師事。現在、日本基督教団霊南坂教会副オルガニスト。青山学院大学オルガニスト。

○田山　与志恵（2nd Vla）賛助
盛岡一高出身。山形大学特設音楽科ピアノ専攻卒。ビオラを中塚良昭氏に師事。盛岡バッハアンサンブル、Kammer musik Zirkel Mのメンバー。現在、市内でピアノ指導に携わっている。

★本日使用されるポジティーフ・オルガンは草刈徹夫氏制作、川西龍二氏調律によるものです。

○カンタータ第158番「平和汝とともにあれ」(バスソロの為のカンタータ)

成立年代はヴァイマール時代（1708～17）に作曲されライプツィヒ時代（1723～24）に修正されたとする説が強い。用途はマリアの潔めの祝日、復活祭第３主日の為のものとして作曲された。今日これは２、３節がマリア潔めの祝日用、１、４節が復活節の為として作られ、二つの合体によって形成されたと考えられている。テキスト（歌詞）は一部ザーロモ・フランク、４節のM．ルターによる他、ナウムブルクの牧師・宗教詩人であるJ．G．アルブニスによる。

２節はソプラノによるコラールが加わる。ここでのバスソロとコラールの織りなすアリアは、聴く者を死と来世への憧憬へと誘い込むであろう。この曲の基詞は感謝と喜びである。「平和がともにあるように」―これはこの世に子羊を送り、私達を罪から解放してくださった神御自身の声である。

編成はオーボエ、ヴァイオリン、コンティヌオ、合唱

１節　ニ長調　$\frac{4}{4}$　レチタティーヴォ
２節　ト長調　$\frac{4}{4}$　アリアとコラール
３節　ホ短調　レチタティーヴォ
４節　ホ短調　コラール

○カンタータ第170番「安息をたのしみ心の喜びを欲せよ」(アルトソロの為のカンタータ)

この作品はライプツィヒ時代1726年７月28日、三位一体第６主日用のカンタータである。この年のカンタータには39番、45番、102番等がある。同年の35番もアルトソロの為に作曲され、オルガンのオブリガートが付けられている。この時代のソロとオルガンが使用された理由については、同年のトマス学校の改築、息子達の独奏者としての起用が挙げられる。スメントは、「ニコライ教会のオルガンは聖歌隊の側面に設置され、ソロ楽器として使用する可能性は、トマス学校に比べてはるかに大きい」と述べている。この時代の作品にはマイニンゲンのJ．L．バッハの作品を取り入れたものが数曲残されているが、この作品もその一つである。歌詞はダルムシュタットの宗教詩人レームスによる。

編成はオーボエ、ヴァイオリン、オルガン、コンティヌオから成る。

１節　ニ長調　$\frac{12}{8}$　アリア
２節　ロ短調　$\frac{4}{4}$　レチタティーヴオ
３節　嬰ヘ短調　$\frac{4}{4}$　アリア
４節　ニ長調　$\frac{4}{4}$　レチタティーヴォ
５節　ニ長調　$\frac{4}{4}$　アリア

○カンタータ第189番「わが魂はほめ讃う」(テノールソロの為のカンタータ)

作品の成立年代は、デュルフェルとテリーによれば、1707～1710年の間、またシュピッタによればライプツィヒ時代の後期とされる。歌詞は最近発見されたBWV　Anh 21（小マニフィカート）の改作であるとみなされる。作品については、今日偽作であるという見方が強い。このカンタータはアリア３曲を含み、暗さや不安は一つも感じられない。全体に明るく伸びやかな雰囲気になっている。特に５節にある躍動するリズム（♬♬♬）は、わきあがる神への感謝と喜びを表現している。

編成はフルート、オーボエ、ヴァイオリン、コンティヌオから成る。

１節　変ロ長調　$\frac{4}{4}$　アリア
２節　変ロ長調　$\frac{4}{4}$　レチタティーヴォ
３節　ト短調　$\frac{4}{4}$　アリア
４節　変ロ長調　$\frac{4}{4}$　レチタティーヴォ
５節　変ロ長調　$\frac{3}{4}$　アリア

○カンタータ第４番「キリストは死の絆につかせたもう」

成立年代は1708年。1724年ライプツィヒ時代に改作。用途は復活祭第１主日用。歌詞はM．ルターによる。

このカンタータは変奏曲の形式をとった唯一の作品でコラール歌詞が全曲を通して用いられている。ここでP．ミースによる解説を引用しておく。

この作品は復活祭にみられる歓喜の要素はまったく見られず、歌詞が受難と復活の思想を一体化しているからであり、しかも聖週間と受難の思想が支配的であり、この認識が第一に聴き手の基本的態度である。

編成はヴァイオリンとコンティヌオ、それにヴィオラが加えられていることが特徴である。全曲ホ短調でまとめられ、６節のアリア$\frac{3}{4}$を除いて全て$\frac{4}{4}$となっている。

１節　シンフォニア
２節　合唱　厳粛さ、危機感、そして声高過ぎる程の歓喜のこの上なく強烈な対照
３節　二重唱（ソプラノとアルト）　死の威力
４節　独唱（テナー）　急速な動きと喜ばしい気分
５節　四重唱　戦いの不快な思い出、死への侮り
６節　独唱（バス）　具体的なヴィジョンを伴う神秘的なまでの姿勢
７節　二重唱（ソプラノとテナー）　祝典性と厳粛で静かな喜び
８節　コラール　祝日の厳粛さ、最終的な確信

（飯島　隆）

○カンタータ第158番「平和汝とともにあれ」

1．Rezitativ (Baβ)

Der Friede sei mit dir,
du ängstliches Gewissen!
Dein Mittler stehet hier,
der hat dein Schuldenbuch und des Gesetzes Fluch
verglichen und zerrissen.
Der Friede sei mit dir!
Der Fürste dieser Welt,
der deiner Seele nachgestellt,
ist durch des Lammes Blut bezwungen und gefällt.
Mein Herz, was bist du so betrübt,
da dich doch Gott durch Christum liebt!
Er selber spricht zu mir:
Der Friede sei mit dir.

2．Arie & Choral (Baβ/Spran)

Welt, ade! ich bin dein müde,
Salems Hütten stehn mir an,
Wo ich Gott in Ruh und Friede
Ewig selig schauen kann.
Da bleib ich, da hab ich Vergnügen zu wohnen,
Da prang ich gezieret mit himm- lischen Kronen.

Welt, ade! ich bin dein müde,
Ich will nach dem Himmel zu,
Da wird sein der rechte Friede
Und die ewge Seelenruh.
Welt, bei dir ist Krieg und Streit,
Nichts denn lauter Eitelkeit,
In dem Himmel allezeit
Friede, Ruh und Seligkeit.

3．Rezitativ (Baβ)

Nun Herr, regiere meinen Sinn,
damit ich auf der Welt,
solang es dir mich hier zu lassen noch gefällt,
ein Kind des Friedens bin,
und laß mich zu dir aus meinen Leiden
wie Simeon in Friede scheiden!
Da bleib ich, da hab ich Vergnügen zu wohnen,
Da prang ich gezieret mit himm- lischen Kronen.

4．Choral

Hier ist das rechte Osterlamm,
Davon Gott hat geboten ,
Das ist hoch an des Kreuzes Stamm
In heißer Lieb gebraten ,
Des Blut zeichnet unsre Tür,
Das hält der Glaub dem Tode für,
Der Würger kann uns nicht rühren.
Halleluja!

1．レチタティーヴォ（バス）

汝のうちに平安あれ、
汝悩める良心よ！
仲保者（キリスト）はここに立ち
犯した罪を記す書より汝の罪を帳消しにし
律法の呪いを破り捨てる。
汝のうちに平安あれ！
汝の魂をおとし入れたこの世の王は
小羊（キリスト）の血によって
打ち砕かれ倒れたのだ。
我が心よ、何ゆえそれ程悲しむのか。
神はキリストによって、汝を愛されたではないか！
神御自ら私に言う、
汝のうちに平安あれ、と。

2．アリアとコラール（バス／ソプラノ）

（バス）この世よさらば！私は汝に疲れ果て、
もはや天の小さな平和の宿こそ私にふさわしい。
私はそこで神と共に憩い
平安と永遠の幸せをみつけるのだ。
私はそこにとどまり、満ち足りて永遠に住む。
そこで私は天の冠で誇らしげに飾ろう。

（ソプラノ）この世よさらば！私は汝に疲れ果て、
今や天に向かうことを望む。
そこにはまことの平安と
永遠の魂の憩いがある。
世よ、戦い、争い常に汝と共にあり、
うつろな空虚の他は何もない。
だが天にあっては、いつの世も
平安と憩いと幸福があるのだ。

3．レチタティーヴォ（バス）

されば主よ、私の心を支配せよ。
私をこの世に
とどめようとするならば
私を平和の子となし給え。
死せる時、私を苦しみから解き放ち給え。
シメオンが平安のうちに去ったように！
私は天にとどまり、満ち足りて永遠に住む。
そして天の冠で誇らしげに飾ろう。

4．コラール

ここに神の計画されたまことの過越の小羊がある。
それは十字架に高く掲げられ
熱き愛もて焼かれたり。
我らの戸口にはその血が掲げられ
我らの信仰が死に向かって
この血をかざす時、
侵入者、我らを侵し得ず。
ハレルヤ！

（今仲　幸雄・訳）

○カンタータ第170番「安息をたのしみ心の喜びを欲せよ」

1．Arie (Alto)
Vergnügte Ruh, beliebte Seelenlust ,
Dich kann man nicht bei Höllensünden,
Wohl aber Himmelseintracht finden;
Du stärkst allein die schwache Brust.
Drum sollen lauter Tugendgaben
In meinem Herzen Wohnung haben.

2．Rezitativ (Alto)
Die Welt, das Sündenhaus,
bricht nur in Höllenlieder aus
und sucht durch Haß und Neid
des Satans Bild an sich zu tragen.
Ihr Mund ist voller Ottergift,
der oft die Unschuld tödlich trifft,
und will allein von Racha sagen.
Gerechter Gott, wie weit
ist doch der Mensch von dir entfernet;
du liebst, jedoch sein Mund
macht Fluch und Feindschaft kund
und will den Nächsten nur mit Füßen treten.
Ach! diese Schuld ist schwerlich zu verbeten .

3．Arie (Alto)
Wie jammern mich doch die verkehrten Herzen,
Die dir, mein Gott, so sehr zuwider sein ;
Ich zittre recht und fühle tausend Schmerzen,
Wenn sie sich nur an Rach und Haß erfreun.
Gerechter Gott, was magst du doch gedenken,
Wenn sie allein mit rechten Satansränken
Dein scharfes Strafgebot so frech verlacht .
Ach! ohne Zweifel hast du so gedacht:
Wie jammern mich doch die verkehrten Herzen!

4．Rezitativ (Alto)
Wer sollte sich demnach
wohl hier zu leben wünschen,
wenn man nur Haß und Ungemach
für seine Liebe sieht?
Doch, weil ich auch den Feind wie meinen besten Freund
nach Gottes Vorschrift lieben soll,
so flieht mein Herze Zorn und Groll
und wünscht allein bei Gott zu leben,
der selbst die Liebe heißt.
Ach, eintrachtvoller Geist,
wann wird er dir doch nur sein Himmelszion geben?

5．Arie (Alto)
Mir ekelt mehr zu leben,
Drum nimm mich, Jesu, hin.
Mir graut vor allen Sünden,
Laß mich dies Wohnhaus finden,
Woselbst ich ruhig bin.

1．アリア（アルト）
満ち足りた平安、すばらしい魂の憩いよ、
それを人は地獄の罪の中にではなく
天国の調和の中に見い出す。
ただ汝のみが弱き胸を強くする。
だから私はこの美徳の贈り物だけを
心の住家に持つのだ。

2．レチタティーヴォ（アルト）
罪の住家であるこの世は、
ただ地獄の歌を吐き
憎しみと嫉妬を広め
サタンの姿となる。
汝の口はまむしの毒に満ち
いくたびも潔き者に罪をかぶせ、
ただ復讐だけを話すのみ。
公正な神よ、
人は何とあなたから遠ざかったことか。
あなたは人を愛する。
しかし、人の口は呪いと敵意を告白し
最も親しいあなたを足で踏もうとする。
あゝ、この罪を断つことは到底できない！

3．アリア（アルト）
我が神よ、あなたにこれ程背いて道を誤った心が、
どんなにか私自身を苦しめていることか。
ただ復讐と憎しみを喜びとする時は
おののき震え多くの苦痛を感ずるのみ。
公正なる神よ、あなたは何とお考えになるのか、
あなたの厳しい裁きが、サタンの奸計によりて
不遜にもあざけらる時には。
あゝ、確かにあなたはこう思っておられる、
道を誤った心がどんなにか私を悩ませているのかと！

4．レチタティーヴォ（アルト）
一体誰がこの世にあって
善く生きることを望めるのか、
人がただ憎しみと不幸とを
愛よりも光に見るとしたなら。
だが、もし私が敵さえも最良の友のように
神の定めに従って愛するなら、
私の心の怒りや憎悪は我が身を離れ、
ただ御自らを「愛」と呼ばれる神のそばで
生きることのみ願う者とならん！
あゝ、調和に満ちた魂よ、
神は一体いつおまえに天国なるシオンをお与えになるのか？

5．アリア（アルト）
私はもうこれ以上この世にとどまることを望まない。
だからイエスよ、私を召して下さい。
私はすべての罪を恐れています。
だからイエスよ、まことに憩える
我が家を見い出させて下さい。

（佐々木　まり子・訳）

○カンタータ第189番「わが魂はほめ讃う」

1．Arie（Tenor）

Meine Seele rühmt und preist
Gottes Huld und reiche Güte.
Und mein Geist,
Herz und Sinn und ganz Gemüte
Ist in meinem Gott erfreut,
Der mein Heil und Helfer heißt.

2．Rezitativ（Tenor）

Denn seh ich mich und auch mein Leben an,
so muß mein Mund in diese Worte brechen :
Gott, Gott! was hast du doch an mir getan!
Es ist mit tausend Zungen
nicht einmal auszusprechen,
wie gut du bist, wie freundlich deine Treu,
wie reich dein Liebe sei.
So sei dir denn Lob, Ehr und Preis gesungen.

3．Arie（Tenor）

Gott hat sich hoch gesetzet
Und sieht auf das, was niedrig ist.
Gesetzt, daß mich die Welt
Gering und elend hält,
Doch bin ich hoch geschätzet,
Weil Gott mich nicht vergißt.

4．Rezitativ（Tenor）

O was für große Dinge
treff ich an allen Orten an,
die Gott an mir getan,
wofür ich ihm mein Herz zum Opfer bringe;
er tut es, dessen Macht
den Himmel kann umschränken,
an dessen Namens Pracht die Seraphim in Demut nur gedenken.
Er hat mir Leib und Leben,
er hat mir auch das Recht zur Seligkeit,
und was mich hier und dort erfreut,
aus lauter Huld gegeben.

5．Arie（Tenor）

Deine Güte, dein Erbarmen
Währet, Gott, zu aller Zeit.
Du erzeigst Barmherzigkeit
Denen dir ergebnen Armen.

1．アリア（テノール）

私の魂はほめ讃える、
神の愛と豊かな恵みを。
私の精神と
心のすべてのおもいは、
神にあって喜ぶ。
神は私の救いであるから。

2．レチタティーヴォ（テノール）

我が身を振り返り、我が生活を思う時、
私はこう叫ばずにはいられない。
神よ！神よ！あなたは何という恵みを下さったのでしょう。
どんなに多くの言葉をもってしても、
それを言い尽くすことはできません。
あなたは善意に満ち、あなたは思いやりがあり、
あなたの愛はどんなに豊かなことでしょう。
私はあなたに向って、誉れと讃美の歌を歌いましょう。

3．アリア（テノール）

神は高い王座の上から
いやしい者の上に目をとめられる。
世の人々が私をいやしめ
低く見ようとも、
神は私のことをお忘れにならず、
大切なものとして扱って下さる。

4．レチタティーヴォ（テノール）

あゝ、いたる所で
私は神が私にして下さった
何とすばらしい恵みに合うことだろう。
だから私は神に私の心を捧げる。
神の権能は天までも及び
翼をもって飛びかう天使たちも
うやうやしく御名の輝きを讃える。
神は私に肉体と生命を、
祝福にあずかる許しを、
又 私をめぐるすべての幸を、
ただ愛の御心ゆえにお与え下さった。

5．アリア（テノール）

あなたの御恵み、あなたの御憐みは
主よ、限りがありません。
あなたは、あなたに心を捧げる貧しい者たちに
慈しみをお示しになるのです。

（服部　幸三・訳）

○カンタータ第４番「キリストは死の絆につかせたもう」

1．Sinfonia

2．Chor

Christ lag in Todesbanden
Für unsre Sünd gegeben,
Er ist wieder erstanden
Und hat uns bracht das Leben;
Des wir sollen fröhlich sein,
Gott loben und ihm dankbar sein

1．シンフォニア

2．合唱

キリストは罪の絆につながれ
我らの罪のために御自身をお渡しになった。
だが、彼は再びよみがえり
我らに真の生命をもたらされた。
それ故 我らは喜びのうちにあり
神をほめ、神に感謝し

Und singen Halleluja,
Halleluja!

3. Duett (Sopran /Alto)
Den Tod niemand zwingen kunnt
Bei allen Menschenkinden,
Das macht alles unsre Sünd,
Kein Unschuld war zu finden.
Davon kam der Tod so bald
Und nahm über uns Gewalt,
Hielt uns in seinem Reich gefangen.
Halleluja!

4. Solo (Tenor)
Jesus Christus, Gottes Sohn,
An unser Statt ist kommen
Und hat die Sünde weggetan,
Damit dem Tod genommen
All sein Recht und sein Gewalt,
Da bleibet nichts denn Todsgestalt,
Den Stachl hat er verloren.
Halleluja!

5. Quartett
Es war ein wunderlicher Krieg,
Da Tod und Leben rungen,
Das Leben behielt den Sieg,
Es hat den Tod verschlungen.
Die Schrift hat verkündigt das,
Wie ein Tod den andern fraß,
Ein Spott aus dem Tod ist worden.
Halleluja!

6. Solo (Bas)
Hier ist das rechte Osterlamm,
Davon Gott hat geboten,
Das ist hoch an des Kreuzes Stamm
In heißer Liebe gebraten,
Des Blut zeichnet unser Tür,
Das hält der Glaub dem Tode für,
Der Würger kann uns nicht mehr schaden.
Halleluja!

7. Duett (Sopran /Tenor)
So feiern wir das hohe Fest
Mit Herzensfreud und Wonne,
Das uns der Herre scheinen läßt,
Er ist selber die Sonne,
Der durch seiner Gnade Glanz
Erleuchtet unsre Herzen ganz,
Der Sünden Nacht ist verschwunden.
Halleluja!

8. Choral
Wir essen und leben wohl
Im rechten Osterfladen,
Der alte Sauerteig nicht soll
Sein bei dem Wort der Gnaden,
Christus will die Koste sein

ハレルヤを高らかに歌わん。
ハレルヤ！

3. 二重唱（ソプラノ／アルト）
この世に在りしすべての人の子は
誰一人として死を克服できなかった。
死は、すべて我らの罪ゆえに、もたらされる。
罪なき者は一人として見い出すことができない。
死はたちまちやって来て、
力をもって我らを捕え、
その領地より決して解き放つことがない。
ハレルヤ！

4. 独唱（テノール）
イエス・キリスト、神の御一人子は
我らの代わりに罪を除くため
この世に来られた。
それ故、すべての権威と力は
死より離れ
死にはなきがらしか残らなかった。
死は針を失ったのだ。
ハレルヤ！

5. 四重唱
それは世にも不思議な戦いであった。
死と生命があいまみえ、
生命が勝利を得た。
死は生命によって呑み尽くされたのである。
古き聖書はこのように告げている。
まるで死が死によってむさぼり食われるように
死からは嘲けりのみが生まれ出た、と。
ハレルヤ！

6. 独唱（バス）
ここにまことの過越の小羊がいる。
それは神御自身がお仕わしになられたのだ。
十字架に高く掲げられ、
熱き愛もて焼かれたり。
我らの戸口にはその血が掲げられ
我らの信仰が死に向ってこの血をかざす時
侵入者、我らを侵し得ず。
ハレルヤ！

7. 二重唱（ソプラノ／~~アルト~~ テノール）
かくして我ら心の喜び、幸せをもって
この崇高なる祭りを祝わん。
主がこの祭りを我らのために輝かせたのだ。
主御自身が太陽であり
その恵みや輝きを通して、
我らの心をお照らしになられた。
今や罪の夜は消え失せた。
ハレルヤ！

8. コラール
我ら、まことの過越の食事のうちに
いざ食し、正に生きん。
古きパン種は恵みの言葉の中に
混じ入るべからず。
キリストは御自身を食物となされ

Und speisen die Seel allein,
Der Glaub will keins andern leben.
Halleluja!

自ら魂を養い給えり。
信仰は、ただキリストに在りてのみ生きること。
ハレルヤ！

（佐々木　正利・訳）

盛岡バッハカンタータフェライン

（1981年７月４日　岩手教育会館にて。）

盛岡バッハカンタータフェラインは、結成以来バッハの宗教曲、主として教会カンタータを取りあげ、バッハの音楽に親しみ学んで、息の長い活動をすることを目的としています。

構成メンバーは、学生、会社員、主婦など多彩な顔ぶれで、選出された役員によって運営され、総会を開いて年間の活動内容を決定しています。

1977.	2. 27	カンタータ歌う会発足		
1978.	2. 26	バッハコンツェルトで芸大と共演	（岩手県民会館大ホール）	147番
	6. 11	岩手カトリックセンター落成記念演奏会に出演	（岩手カトリックセンター）	4番
	11. 12	チャペルコンサート	（盛岡聖公会）	78番
1979.	10. 6	BACH　ABEND	（岩手カトリックセンター）	158番、131番
1980.	2. 27	バッハの夕べで芸大と共演	（岩手県民会館大ホール）	191番、80番
	11. 16	チャペルコンサート	（盛岡聖公会）	61番、172番
	12. 22	クリスマス・チャリティーコンサート	（岩手カトリックセンター）	172番
1981.	1. 25	新春コンサートに出演	（花巻市文化会館）	モテット６番
	7. 4	BACH　ABEND	（岩手教育会館）	182番、196番
	10. 11	チャペルコンサート	（盛岡聖公会）	106番
	12. 19	チャリティー・バロックの夕べに出演	（岩手カトリックセンター）	150番

Sop	泉谷麻利子	菊池　誠子	斎藤　純子
	澤田　東子	菅原　節子	盛内　三雪
	柳田　松子	八幡　嘉子	
Alt	潮田　容子	岡崎由紀子	金山久見子
	桐原　絹子	高橋　孝子	早川芙美子
Ten	飯島　隆	石倉　久夫	鈴木　康之
	○佐々木　修	○辻　秀幸	
Bas	魚住　英昭	佐藤　智一	下田　潤
	福士　幸雄	○浦野　実成	○黒岩　雅弘

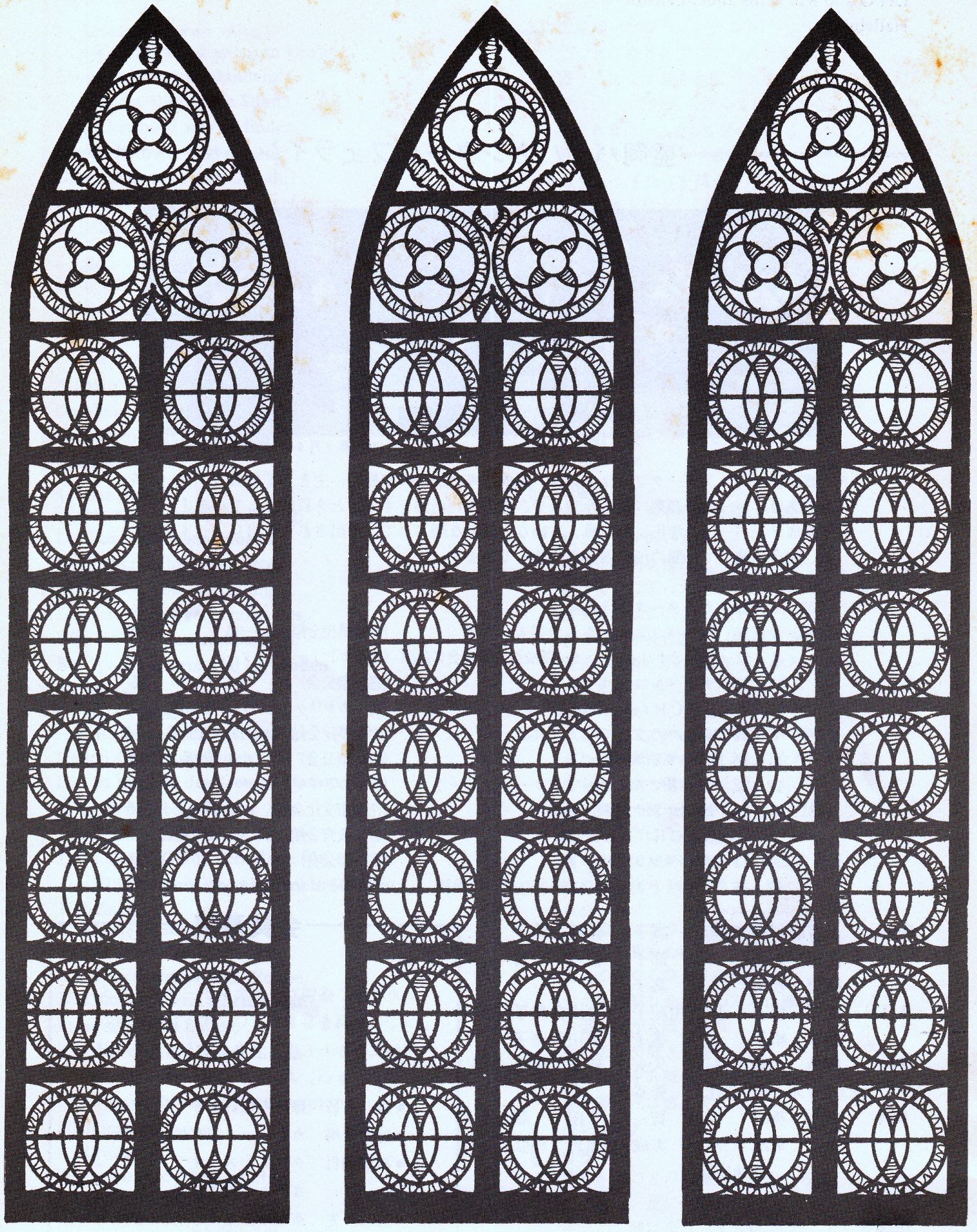
（○　賛助出演）

指揮者　佐々木正利
練習伴奏者　飯島　陽子

会員募集

ただ今、盛岡バッハカンタータフェラインでは会員を募集しています。合唱経験の有無にかかわらず、どなたでもお気軽においでください。

- 練習日　毎週火曜日PM６：30～9:00
- 練習会場　カトリック志家教会伝導館
- 練習曲目　クリスマス・オラトリオ
  ヨハネ受難曲など。
- 連絡先　斎藤純子　TEL 22-2977



デザイン＆レイアウト／盛内三雪